

すこと」を課題としている(序章)、という著者自身の言葉に表されているとおり、通常の経済学的な視点からの農民層分解論、あるいは東南アジア開発経済論といった研究とは少々趣の異なる、評者のような専門外の者でも読み易い、地域研究としても優れたモノグラフになっている。著者が1980年代に調査を行った、中部タイ、ナコンパトム県ナコンチャイシー郡ワットラムット行政村ランレーム区は、序章の説明によればメー・クローン川流域総合開発事業によって圃場基盤が整備され、高収量品種 K. Kh 品種の導入を軸に1970年代に「緑の革命」が進行した、タイの稲作の中核地帯に位置する一農村である。歴史的には大地主の存在しない小農経営の優越した典型的な地域であり、他方で60年代以降本格化する工業化の下で首都圏の経済圏に組み込まれ、商品市場だけでなく労働市場を通じて資本主義化が進行している地域でもある。

それでは以下内容を概観したい。第1章では、まず水野浩一氏の「屋敷地共住集団」概念を援用しつつ、親のライフサイクルに伴って農地がハイ・タムキン(生活扶助的貸与)、ペーン・ハイ(分与)、親の死亡後の農地の再調整、と言う形で段階的に子供達に譲渡され、さらにキョウダイ間のハイ・ドゥーレー(委託)に至るタイ家族のプロセスが考察され、また根底に存在する家族規範である「土地の共同保全」観念について検討されている。続いてランレーム区における土地なし層の発生が、開拓当時の歴史にまでさかのぼって考察される。この村は1880-90年代に農民家族により開発されたが、それぞれの家族の男子労働力数と入植の时期的差異により、開墾段階より既に土地占有面積規模の大小による有力家族と非力家族の分化が発生していた。1910-20年代頃まではまだ無主地が存在し、新たに土地を開墾し占有する可能性があったが、1930年代に入ると無主地は枯渇し、土地の私有権意識も高まってくる。さらに1940-50年代には土地なし世帯はもはや枝ムラ形成と土地占有のサイクルを行えず、家族周期論的メカニズムは機能し得なくなる。非力な家族の第3世代を中心に土地なし世帯が、ライフサイクル上の経過的な存在形態から恒常的な形態へ1つの階層として堆積してくる。こうしたムラ別=階層別構成をとる村落構造が「緑の革命」の始まる出発点において既に形成されていた、と著者はまとめている。

続いて第2章では、土地なし層の今日的形態である雑業層の、農村内日雇い市場との関わりおよび都

田坂敏雄

『タイ農民層分解の研究』

御茶の水書房 1991.2 xi+359 ページ

本書は、1980年代初頭のタイの「農村社会の立体像を『緑の革命』と農民層分解の視角からあぶりだ

市への流出構造について分析されている。上述のプロセスによって堆積していた土地なし層は、1960年代までは屋敷地の多様な経済的利用と親族関係等を利用した零細な耕地の借入れによって生活を営んでいたが、1960年代以降の従属的工業化進行下のバンコク都市労働市場の拡大、さらに1970年代以降の「緑の革命」に伴う村内日雇い市場形成による内外の就労機会拡大により農外賃労働に依存し、世帯維持・再生産のメカニズムを変化させるようになり、今や雑業層として農村内に滞留している。またランレーム区から都市への余剰人口の流出は、階層と母村の相違による流入労働市場の相違や同一市場下での業種の相違が存在するが、その中心的送り出し階層を雑業世帯としつつ、ほぼ全階層的に見られる現象となっていると言う。

第3章では、1970年代「緑の革命」以降のランレーム区の農法・農業経営形態の変容と、それが農民の各層に及ぼす影響が分析されている。「緑の革命」は、ランレーム区の農法を「寝て暮らせる」農法からK. Kh型品種の導入を軸とする労働集約的農法へと転換させた。この転換の基礎条件をなしたのがメー・クローン川総合開発計画であり、以後継続的に行われた圃場基盤の開発事業は耕区の水利条件を大幅に改善した。K. Kh型品種の急速な普及は農法の改革をもたらし、水稻の二期作化が進行していった。しかしK. Kh型品種の栽培は在来品種の農法と違って、施肥・水管理・病虫害防除・雑草除草等の労働集約的な管理が要求される上に、田植えと稲刈りの適期の短縮と早期化を必要とし、これによって両期間での労働需要が急増することになる。つまり新しい農法は耕耘機の導入等の機械化を押し進める一方で、より以上に手労働に基づく労働集約的な農法として成立し、この結果この様な新しい生産力構造の下で、従来の家族労働力を基本とし不足分を労働交換によって補完するような労働力編成では対応し得なくなり、日雇い労働力が求められることになる。しかしこの村はバンコク首都圏に位置し、1960年代以降拡大してきた都市労働市場による農村人口の吸収が一方で行われていたため、土地なし層として滞留する過剰人口も農繁期には不足するという「過剰の中の不足」現象が発生してくる。これに対応して、上層農と下層農との間に雇用労働力の調達に優劣が生じ、これがさらに生産力格差を拡大する。ここにおいて親族的な関係を利用し自作地の購入や借入れによる規模拡大＝ブルジョワ的發展の

可能性を秘めている上層農、農地の借入れによってかろうじて経営を維持する中農、農業所得によって生計を維持できず赤字のため農地を手放す世帯を一部輩出しつつ、次第に農外所得、特に賃金労働への傾斜を深めプロレタリア化が進行していく貧農層、そして中上層農との関係を持ちつつ都市への流出が続く雑業層へと分化が急速に進行していく。また「緑の革命」による労働集約的農法の形成は、生産力格差と農家蓄積の優劣を拡大しただけではなく、農業経営全体の工業資本への依存を深めさせ、農外資本は労働市場に加え商品市場を通じて農業経営を直接掌握するに至っている。一方、以上の状況下で中上層農の多くは農地の借入れによって経営地の拡大を図ろうとし、彼らの借入れ地は耕作地の6割に達している。貸出地の約半分は区外の所有者、特にランレームからの他出者によって所有され、さらにこれらの農地の貸借は小作(ハイ・チャオ)とは厳密に区別されたハイ・タムキンやハイ・ドゥーレーの形態で、親子間ないしキョウダイ間で行われる場合が多いと言う。これは均分相続制の下でいったん分割された土地が共同保全や相互扶助の目的で再分配された形態であるが、著者は現代のこの関係はさらに親族的な機能と諸関係を利用・動員することによって「緑の革命」の下での情勢に対応しようとする「ブルジョワ的再編の形態」として把握することができる。と述べている。

最後に終章では、補足として1970年代以降進行した農民層分解の形態と性格は、水野の説明するところのライフサイクル的階層分化とは異なる性質のものであることが説明されている。以上本書で主張されている論点をまとめると、ランレーム区の農民層の近代的分解は上述の「緑の革命」の進行と共に本格化したものであるが、70年代の分解という現象は、既に歴史的に形成されていた土地所有の分化と階層構成の在り方に規制され進展し、そして近代的分解に先立つ階層分化の過程とは、伝統的な「分化」によって形成されたものであり、家族論的観点、特に末子継承＝均分相続の原理と、派生ムラの形成論理の観点より説明し得る。伝統的分化において既に土地なし層が出現していたが、都市労働市場の拡大と「緑の革命」による農業生産力の増大が、この分化を本格的分解に変化させ、さらに変容しつつも残存する「家族規範」に基づく農地貸借が中上層農民の農地拡大を可能にしているということであろう。このほか一農村社会内部に限定せず都市労働市場と

の関係を重視する点、そして「緑の革命」以後の農業が農法的に「労働集約的」とであるという点も、また筆者の重要な論点の1つであると考えられる。

評者には、この著者の広範な問題意識と多方面に渡る深い学問的造詣の集大成を包括的に議論する能力は全く持ち合わせていないが、かつて北部タイで調査した経験に基づき最後にあえて幾つか私見を述べさせてもらおうと、まず中上層農の農地拡大に貢献すると記述されているドー・レー関係は、現代に於いても果たして家族財産の共有観念と結びつく均分相続制度を基本とする「家族規範」や「土地の共同保全」原理で説明可能なのだろうか。確かにドー・レーには一見非市場的原理が根底に存在するように思われるが、このような動機が果たして資本主義的農業に積極的の反応を示す農民の意識の中に矛盾なく存在すると考えるべきなのであろうか。例えばキョウダイに販売・貸与すれば移住先で失敗した場合に帰ってこれると言う貸出者側の一種の合理的な危険分散的思考と結び付けて考えることは出来ないのだろうか。またドー・レーは、無条件に成立する関係と言うよりは農地規模・地価・小作料・都市労働市場の展開度・農産物価格といった諸条件の特定の関係下でのみ起こり得る関係のようにも思われる。場合によっては均分相続制度は農地の拡大や農民層分解を抑止する方向に働く側面も持ち合わせているのではないだろうか。タイの農業の資本主義化が進行するなかで、どのように「伝統的形態」が存在し、それがこの進行に対しどのように「存在」していくのか、今後さらに深く検討されていく必要がある。また北部や東北部といった「緑の革命」の恩恵を中部のように受けなかった地域にも商業農業は着実に定着しているが、他方、地方都市労働市場の発展は農村余剰労働力の一部を吸収しつつあると言える。これらの地域において農民層分解はどのような形態に進展しているのかというと、北部タイなどは必ずしも中部的形態には進行して行かないように思われ、著者が今後この問題提起をタイ全体を視野にいれた分析においてどのように発展させていくのか研究の成果が待たれる。しかし、評者は経済学者である著者の「伝統的」規範や観念的世界に対峙しようとする問題意識に共感すると共に、著者の調査者としての優れた資質を示す細かい聞き取りや分析作業における造詣の深さには、後塵を拝する者として深い尊敬の念を抱く。農業経済の専門家だけでなく、タイや東南アジアの農村社会に関心のある

方々に広く薦めたい1冊である。

[関 泰子]